

オゾン層・紫外線の年のまとめ（2016年）の概要

【オゾン層の状況】

世界のオゾン層

・2016年の年平均オゾン全量の参照値（1997～2006年の累年平均値）からの偏差は、南北両半球の高緯度と赤道付近で正偏差、それ以外の南北両半球の低緯度と中緯度で負偏差となった。特にロシア北西部の負偏差と南半球高緯度の正偏差は顕著であった。

本文 1～4 ページ参照

・世界全体のオゾン全量は、1980年代に大きく減少したが、1990年代後半以降は減少傾向が止まった。2000年以降ではわずかな増加がみられるが、最近5年間のオゾン全量は、オゾン層破壊現象が顕著に現れる以前の1970年代と比較すると、依然として少ない状態にある。 本文 16～17 ページ参照

南極オゾンホール

・2016年の南極オゾンホールの最大面積は、2,270万km²で南極大陸の約1.6倍を記録した。この面積は最近10年間の最大面積の平均値と同程度であり、南極オゾンホールの規模は依然として大きい状態が継続していた。 本文 5 ページ参照

北半球高緯度のオゾン層

・2016年の北半球高緯度では、2月中旬から3月上旬にかけて、この時期のオゾン全量としては非常に少ない280 m atm-cm以下の領域がロシア北部を中心に広く分布した。北半球高緯度の2月の月平均オゾン全量は、1997～2006年の月別累年平均値と比較して、-20%以下の負偏差が広範囲で観測された。 本文 9～10 ページ参照

日本上空のオゾン層（札幌、つくば、那覇、南鳥島）

・2016年の日本の月平均オゾン全量は、参照値に比べ、札幌、つくば、南鳥島では1年を通して並で推移したが、那覇では6～10月にかけて少ない月が多かった。つくばと那覇の10月の月平均オゾン全量は、その月として観測開始以来の最小値を記録した。 本文 12 ページ参照

・国内のオゾン全量は、札幌とつくばにおいて、1980年代から1990年代半ばまで減少し、その後緩やかな増加傾向がみられる。那覇においては1970年代半ばの観測開始以降、期間を通して緩やかな増加傾向がみられる。 本文 26 ページ参照

【紫外線の状況】

国内の紫外線（札幌、つくば、那覇）

・2016年の国内の観測地点における紅斑紫外線量は、札幌では6月にその月として観測開始以来第2位の少ない値、8月にその月として観測開始以来第2位の多い値を記録した。つくばでは、5月に4年連続で参照値に比べ多くなり、2016年はその月として観測開始以来第4位の多い値となった。那覇ではオゾン全量が最小値となった10月と、年間を通して最も紅斑紫外線量が多い7月に記録的な高い値となった。 本文 14 ページ参照

・国内の紅斑紫外線量年積算値は、1990年初めの観測開始以降、有意に増加している。

本文 30 ページ参照

南極昭和基地の紫外線

・2016年の南極昭和基地における紅斑紫外線量は、参照値に比べ、9月と11～12月は並であったが、1～4月は多かった。 本文 15 ページ参照